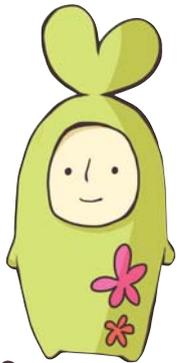


藤女子大学 図書館 だより



Fuji Women's
University
Library

秋号

No.92
2016.10

1. 動物絵本画家 あべ弘士氏が花川に!
..... 柴村 紀代
4. 教員著作紹介
6. 英語多読のススメと
「Maruzen e-book library」の紹介
外国語教育研究センター
高橋 博
7. 機関リポジトリ運用開始
図書館委員会からのお知らせ
8. 図書館資料Navi 第8回
ミケランジェロとシステーナ
礼拝堂の天井画
日本語・日本文学科 松村 良祐

CONTENTS



動物絵本画家 あべ弘士氏が花川に!

本学非常勤講師(元本学保育学科 教授) 柴村 紀代

2016年7月1日、保育学科1年「子ども文化論」の講義にあべ弘士さんが来てくれた。あべさんは今、最も注目されている絵本画家の一人である。旭川生まれのあべさんは旭山動物園の飼育係25年を経て絵本画家になったという異色の存在だ。

講義はまず旭山動物園の新米飼育係の話から始まった。これがすこぶる面白かった。飼育係になって最初に受け持つのが鳥の係。あひるやカモやがちょうの世話をしているうちにがちょうが飛んで園外に逃げ出したという。「大変です。がちょうが飛んで逃げました」「がちょうが飛ぶわけないだろう」「でも、ほんとに飛んでったのです」がちょうの風切羽を切るのが遅れたせいで、がちょうが飛んで逃げ出したのだという。ここで学生に質問。「アヒルのオスとメスの見分け方を知っているかな」

と聞かれた。カモのオスは首の回りがきれいな緑色なのですぐわかるが、アヒルはわからない。でも、後ろの尾羽根がくるっとカールしてるのがオスだそうで、それさえわかればたくさんのアヒルを「はい、オス、オス、メス、オス……」とたちまち識別できるという。「今度、動物園に行ったら自慢しよう」と教えてくれた。



尾羽根がカールしているアヒルの図

続いて白い紙が配られて、「紙にウサギを描いてみよう」とお絵描きタイムになった。さすが保育科の学生、けっこううまく描いているように見えたが、「みんな、違うねえ」とあべさん。「ウサギの眼は顔の両端にあってね」とすらすらと描いた。「うわあ、うまい」と学生から歓声があがると「私はプロです」と一言（確かに……。）



ウサギの絵で盛り上がる教室

さて、すっかり盛り上がったところで、あべさんが実際に旅をした北極のスライドを見せてくれた。シロクマの親子が写っていて、2ひきの子グマが母熊のあとを追っている。1ひきは勇敢に海のなかにジャンプ。1ひきはこわごわと飛び込む様子がかわいい。



しろくまのラフスケッチ

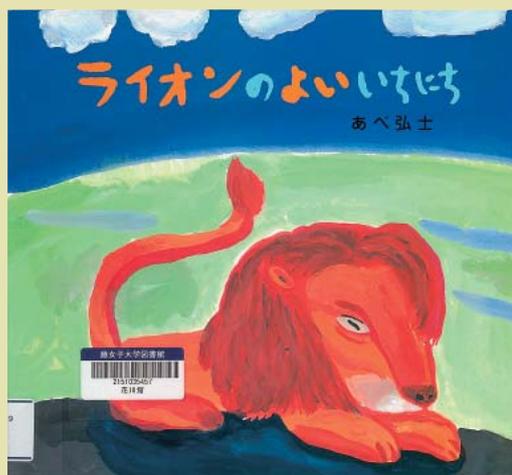
これを基に作られたのが『ふたごのしろくま』シリーズだ。この北極探検の様子は『こんちき号北

極探検記』（講談社 2012）に詳しく描かれている。ぜひこれもご一読を！



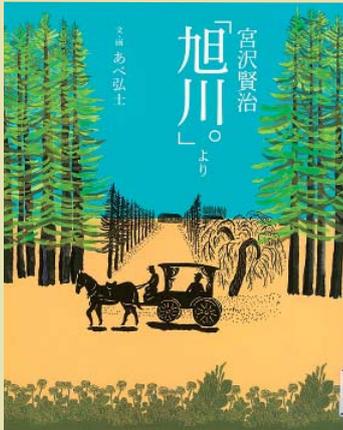
あべさんは動物園を退職した後、念願のアフリカのセレンゲティ国立公園に出かけている。これも実際のスライドを見せてくれて、その後で『ライオンのよいいちにち』を読んでもらった。

このライオンはオスライオンで、子どもライオンを連れて散歩に出かける。子どもたちは楽しそうに付いてくる。やがて巨大な岩山で昼寝。これも実際にセレンゲティにある岩山だという。草原ではメスライオンが狩りをし、シマウマの群れがどどどと逃げている。やがて遠くに倒されたシマウマ、子どもたちが「あっ、お母さんだ」と駆け下りていく。ここには食べるものと食べられるものが、あっけらかんと描かれている。



このオスライオンはあべさんに似ている。堂々としていてどこか可愛げがあって、いざというとき頼りになりそうだ。

最後に見せてくれたのが2015年に出版された『宮沢賢治「旭川。」より』だ。これは賢治が



1923年8月、樺太に行く途中で旭川に降りたときの詩を元に作った絵本である。

詩を絵本にするのはむずかしい。とくに賢治の詩はそれ自体スケッチのよう

で、原文のままに絵本にすると平凡な絵になってしまう。きっとあべさんは悩んだに違いない。その結果、賢治の詩をそのまま使うのはやめて、あべさんの簡潔なことばで絵本にした。この文がいい。気が付かない人はそのまま賢治の詩とってしまうほどだ。川の町、旭川を飛ぶオオジシギも見事だ。あべさんはスライドを見せながら、昔見たオオジシギの羽音をまねしてくれた。オオジシギが何羽も一緒になって急降下するときの、雷のような羽音を熱演してくれた。

絵本の世界を、実際に作った人の解説で楽しむ。これは学生にとって得難い経験だったと思う。

図書館の入り口のウインドウには、6月から8月にかけてあべさんの絵本が飾られていた。今、図書館内にあべさんが描いてくれた色紙がある。「ゾウの時間ネズミの時間」の絵だ。これは生物学の話で、心臓を打つ鼓動数はどの動物もほぼ同じだという。小さい動物は一生を全速力でかけぬけていき、大きい動物はのんびり一生を過ごす。「ネズミは早く死んでかわいそうだななんてことは、ないんじゃないかな」と、あべさんは生物それぞれに固有の世界観があり、生き方があることを言っている。動物園の飼育係を経て、動物絵本画家となったあべさんの覚悟のほどがこの色紙に表れているように思えてならない。



色紙は現在も花川館に展示中です

柴村紀代先生略歴

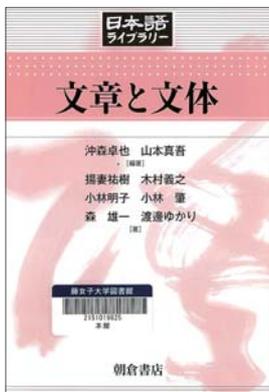
1946年台湾で生まれる。函館市中部高校卒、藤女子大学文学部国文学科・日本女子大学家政学部児童学科修士課程修了。20代から児童文学を書き、30代で『お母さんの湖』を出版。以後藤女子大学他で児童文学の講義をしつつ、創作・研究活動を続ける。7月に、「絵本の40年」と題して保育科で絵本を伝えてきた話を講演した。ネコ好き。『ネコのいる風景』という著書あり（花川館に所蔵あり）。札幌えほん研究会代表。日本児童文学学会・絵本学会会員。2000年4月に本学人間生活学部保育学科専任教授として着任され、2015年3月にご退職。現在は、非常勤講師として勤務。

文中で登場した本の紹介（すべて花川館所蔵）

* 『ふたごのしろくま』シリーズ全3冊	講談社	2012年	376.19 / A12
* 『こんちき号北極探検記』	講談社	2012年	297 / A12
* 『ライオンのよいいちにち』	佼成出版社	2001年	376.19 / A12
* 『宮沢賢治「旭川。」より』	BL出版	2015年	376.19 / A12
* 『ゾウの時間ネズミの時間』本川達雄文、あべ弘士絵	福音館書店	1993年	376.19 / Mo85

教員著作紹介

こちらで紹介されている本は全てそれぞれ所蔵館の教員著作コーナーに置いています。貸出も可能ですのでぜひご利用ください。



日本語ライブラリー
『文章と文体』
沖森卓也、山本真吾編著；
揚妻祐樹 [ほか] 著
朝倉書店発行
2015年5月15日
所蔵館：本館
日本語・日本文学科
揚妻 祐樹

文章を書くためにはいろいろな技法や決まりごとがありますが、それ以前にそもそも日本語で文章を書くという言語行為とはどのようなものなのでしょうか。本書はこのことを考えるための入門書で、出来るだけ最新の研究成果を取り入れつつ、考察の切り口をレイアウトしたものです（揚妻は第3章「文法と文章」を担当）。この本はレポートや卒論を書くための実践的な指南書ではありませんが、日本語の文章の歴史、日本語の文字・語彙・文法と文章とのかかわり、話し言葉と書き言葉の違いなどを知っておくことは実際の文章を書く時にながし役立っはずで、実用目的で文章を考える人は、それぐらいの期待値で読んでいただければ幸いです。



『アーカイブ基礎資料集』
小川千代子・菅真城編著
大阪大学出版会発行
2015年4月30日
所蔵館：本館
図書館情報学課程
小川千代子

最近、各大学でアーカイブをテーマとした授業が増えている。アーカイブ専門家を配置する組織＝つまりアーキビストの就職先も増えてきた。

アーカイブを扱うにはルールとマナーがとても大切で、その根拠は常に手元に置かなければ、アーカイブの勉強も仕事も進まない。アーカイブの仕事をするには、いつもその根拠になる法令や、専門家としての行動規範を身近に備え、折に触れ参照する必要がある。だから、法令や行動規範に関する資料をまとめたものがほしい。そんな思いを形にした資料集が本書である。著者としてはぜひ座右の一冊におすすめしたい。

なお、本学では授業で使うため、図書館の図書館情報学課程の指定図書コーナーに15冊備えていただきました。活用してください。



『多様性を活かす教育を考える七つのヒント：オーストラリア・カナダ・イギリス・シンガポールの教育事例から』
伊井義人編
共同文化社発行 2015年9月30日
所蔵館：花川館
人間生活学科
伊井 義人

学校教育には、目標となる大きなテーマが二つある。一つは、子どもたちの個性を伸ばすということ（多様性の尊重）。もう一つは子どもたちが平等に一定の学力・教育水準に到達すること（質の保障）、である。言葉自体は簡単だが、その両立はとても難しい。なぜなら、多くの学校教育関係者は、片方の目標を尊重すると、もう片方の目標を軽視してきたからである。不思議なことに、一定の水準に到達する過程において、子どもたちや教員、そして学校そのものの多様性を積極的に活用しようという試みは、これまであまりなされて来なかった。本書は、この二つのテーマの両立を目指す四カ国の教育事例を、才能教育・多文化教育・教員養成・大学教育・学校スタッフの活用・個性に対応したカリキュラム編成・宗教教育・地域特性の活用という視点から紹介した本である。



『最後の真珠貝ダイバー』
藤井富太郎
リンダ・マイリー著；青木麻衣子、松本博之、伊井義人訳
時事通信社発行
2016年4月27日
所蔵館：花川館
人間生活学科
伊井 義人

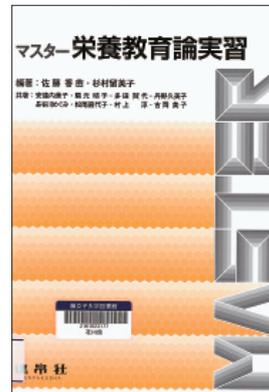
オーストラリア極北部とパプアニューギニア南部の国境に「木曜島」という、小さな島がある。そこには、アイランダーと呼ばれる先住民系、中華系、マレー系、ミクロネシア系オーストラリア人が居住している。そして、このような多様な居住者にまじり、多くの日本人・日系オーストラリア人が木曜島に住んでいることはあまり知られていない。ただ一度、司馬遼太郎が『木曜島の夜会』という短編小説を残しているが、これが多くの日本人にとっては、この島との接点であろう。百年以上前、この島の居住者の大部分は真珠貝に一攫千金を夢見た日本人だった。真珠貝採取は、常に大きな危険と隣り合わせであり、今でも木曜島中心部の丘の一面には、日本人の墓が所狭しと雑然と並んでいる。本書では、そんな真珠貝ダイバー藤井富太郎の伝記を日本語に訳したものである。



藤女子大学人間生活学部
公開講座シリーズ1
『居場所のない子どもたちへ』
隈元晴子編著

藤女子大学人間生活学部発行
2016年3月30日
所蔵館：両館所蔵
食物栄養学科
隈元 晴子

日本はこの数十年間で公衆衛生や医療、栄養などが劇的に進歩、改善し、世界有数の長寿国となりました。しかしその一方で、さまざまな発展は社会全体のシステムに歪みを生じさせ、子どもたちが今、「貧困」という深刻な状況に曝されています。この問題解決の糸口を探るために、本学の学生たちが地域やNPOと連携しながら、1人でも多くの子どもに自己肯定感を高めてもらえるよう、楽しく学ぶことのできる居場所づくりを行っています。本書は、この活動に携わる団体関係者と学生、卒業生からの報告のほかに、本学の多様な専門分野の教員に執筆をいただきました。子どもの貧困をさまざまな角度から考察し、かつ読みやすい内容となっています。



『マスター
栄養教育論実習』
佐藤香苗、杉村留美子編著

建帛社発行
2016年5月10日
所蔵館：花川館
食物栄養学科
隈元 晴子

栄養や食について学んでいくと、健康に過ごすための「理想的な」食生活を思い浮かべられるようになり、理想と現実との差を解消するための図式を描くことができます。それ自体は理論的にも単純なものです。しかし、一人ひとりの人間とそれを取り巻く環境との関係は複雑なので、単に「理想」を提示するだけでは不十分であり、管理栄養士には一人ひとりの揺れ動く思いに寄り添う伴走者となることが求められます。そこで本書では、「量」的なアセスメントだけではなく「質」的な情報収集法として「フォーカスグループインタビュー」を取り入れるなど、従来の実習書よりも多角的な視点で栄養教育マネジメントの各過程を習得できるよう構成しているのが特徴です。
※隈元先生は第1章4、第3章5を執筆されています。



食べ物と健康Ⅳ
『食事設計と栄養・調理』
菊地和美編著

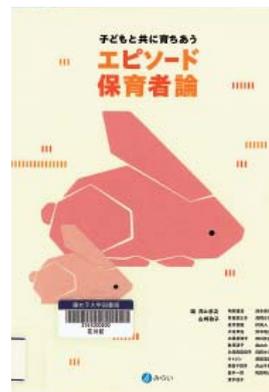
三共出版発行
2015年3月20日
所蔵館：花川館
食物栄養学科
菊地 和美

本書は、【食事設計と栄養・調理】について解説した教科書です。この食べ物と健康シリーズには既にⅠ～Ⅴまで刊行されており、Ⅰ 食品の分類と成分、Ⅱ 食品の機能、Ⅴ 食品衛生学がNo.88で紹介されてきました。

本書の構成は管理栄養士課程モデルコアカリキュラムの到達目標を活用し、【調理の基礎】・【おいしさの評価方法】・【食事設計】という3つの観点からアプローチして特徴をもたせています。

また、各章には章末問題を設けて自ら確認できるようにすると共に、一方では「コラム」として、養生訓や食生活の背景などを掲載しました。

本書を通して調理を科学的根拠に基づいて説明できるように、多方面の方々に応用していただきたいと思っています。



『子どもと共に育ちあう
エピソード保育者論』
井上孝之、山崎敦子編

みらい社発行
2016年2月10日
所蔵館：花川館
保育学科
吾田富士子

子どもにかかわる世界の長期縦断研究では、乳幼児期の重要性が見直されています。アタッチメント研究では、認知的な力を支える非認知的な力が、大人になってからも社会性の発達に大きな影響を与えること、教育経済学からは、お金を投資するのであれば、乳幼児期が最も効果的であることなど。行動遺伝学では、養育負担の大きいヒトに備わった、親以外の養育の役割が注目されています。生涯発達における乳幼児期の重要性は、現在検討されている保育所保育指針改訂でも、乳児・3歳未満児保育の充実として反映されています。

こうした保育の質が問われる時代の保育者の学びのテキストとして、エピソードを通して考えることを目指したのが本書です。
※吾田先生は第4章を執筆されています。

英語多読のススメと「Maruzen e-Book Library」の紹介

外国語教育研究センター 高橋 博（食物栄養学科）

皆さんは、どうやって日本語の文章を読めるようになりましたか？ 辞書を引き引き単語帳を作りながら1ページずつ読んで覚えた、なんて人はいませんよね。簡単な絵本から読み始めて、だんだんより複雑な文章を文脈の中で自然に理解していったはずです。前者は「精読」的アプローチ、後者は「多読」的アプローチといえます。

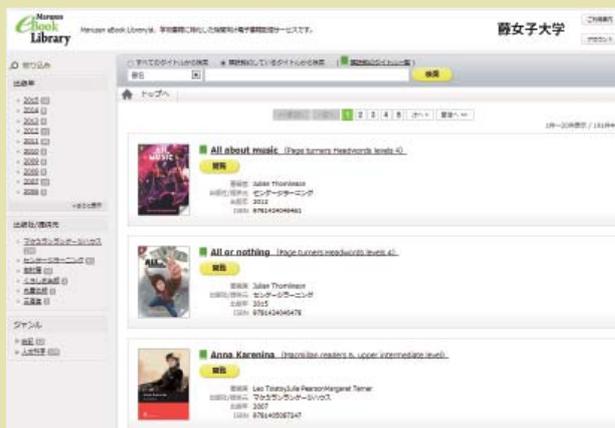
もし「英語を読むのが苦手」と感じている人がいたら、それは「精読」ばかりやらされてきたからかもしれません。知らない単語だらけの、別に読みたくもない文章を四苦八苦しながら読まされる。そんな経験だけだったら、日本語だって果たして自由に読めるようになっていたかどうか。そう考えると、多読（extensive reading）が英語のリーディング力養成にとっても重要な鍵を握ることが分かります。

では、どうすればいいか。英語の多読にはいくつかの重要な「コツ」があります。まず、「自分が面白いと思う本を読む」こと。興味のある本なら読むのが苦になりません。その上で、「易しい本から始めて、徐々に難しい本に挑戦する」ことがとても大切です。具体的には、1ページに知らない単語が5～6語くらいの本から始めて、それが簡単だと感じるようになったら、その上のレベルの本に移行していく。そして、「分からない単語は気にしない（辞書をいちいち引かない）」で「英語を英語として（訳さないで）読む」ことを続けてください。それが「英語の回路」を脳内に作る秘訣です。

実は、そうした読み方を可能にする最強のツールが藤の図書館から利用可能になりました。「Maruzen e-Book Library」なら、学外からでもスマホやタブレットで簡単にアクセスでき、全175タイトルの中から自分のレベルと興味に合った英語の本を選んで読むことができます。利用はもちろん無料。バスや地下鉄の中でも気軽に読める「ポータブル」英語図書館です。最大の特徴は、学習者用に無理なく読めるよう英語表現が厳選されていることと、難易度がレベル別に細分化されていること（「マクミラン」シリーズは6レベル、「センゲージ」シリーズは12レベル）。これらは graded readers（段階別読本）と呼ばれるもので、どのレベルから始めても自然にリーディング力を高められるよう設計されています。現在は花川の「Academic Reading」の授業で推奨していますが、藤の学生なら誰でも知っている、そんなシリーズにしていきたいですね。手のひらサイズの英語図書館、皆さんも使ってみませんか？



学外からのアクセスにはアカウントの取得が必要です。オンライン上で簡単に取得できます。詳しくは図書館サイトのトップページにある Maruzen e-Book Library のロゴの下にある「利用ガイド(PDF)はこちら」のリンクをクリックしてください(上図参照)。



藤女子大学機関リポジトリ運用開始

本学では、2016年9月から機関リポジトリの運用を開始しました。

前号(91号)で機関リポジトリ公開に向けてのお知らせをしましたが、2016年9月から運用を開始しました。

機関リポジトリとは?

リポジトリ(repository)とは、倉庫・貯蔵庫・資源のありかという意味の英語です。

大学や研究機関等で作成された教育・研究成果を収集、蓄積、保存し、インターネットを通じて世界に発信・提供するシステムです。教育・研究成果を公開することで、研究者の認知度の向上、知的生産物の長期保存等、社会への貢献が期待できます。

現在多くの大学で、機関リポジトリの整備が進められています。みなさんがCiNiiで論文を検索した時に、「機関リポジトリ」という表示を目にすることが増えたと思います。論文を利用する側のメリットとしては、各大学・研究機関等が機関リポジトリを構築することによって、得たい論文を素早く入手することが可能となります。

ただし、利用する場合は、著作権等に注意して利用してください。

現在は、本学紀要のみの収録となっていますが、今後収集コンテンツについて検討をし、充実したものになるよう整備を進めています。

〈収録紀要 2016.9現在〉

●藤女子大学紀要第I部 第4号(1966)~第49号(2012)※許諾を頂いた論文のみ
(誌名変遷あり「藤女子大学文学部紀要→藤女子大学・藤女子短期大学紀要→藤女子大学・藤女子短期大学紀要. 第I部→藤女子大学紀要第I部」)

●藤女子大学文学部紀要 第50号(2013)~第53号(2016)+
(「藤女子大学紀要第I部」の継続誌)

●藤女子大学紀要第II部 第5号(1967)~第49号(2012)※許諾を頂いた論文のみ
(誌名変遷あり「藤女子大学文学部紀要→藤女子大学・藤女子短期大学紀要→藤女子大学・藤女子短期大学紀要. 第II部→藤女子大学紀要第II部」)

●藤女子大学人間生活学部紀要 第50号(2013)~第53号(2016)+
(「藤女子大学紀要第II部」の継続誌)

●キリスト教文化研究所紀要 第1号(2000)~第15号(2014)+

●人間生活学研究 第13号(2006)~第23号(2016)+

●藤女子大学社会福祉研究所年報 第1巻第1号(2006)

●藤女子大学QOL研究所紀要 第2巻1号(2007)~第11巻1号(2016)+
(「藤女子大学社会福祉研究所年報」の継続誌)

●家庭科・家政教育研 第7号(2012)~第10号(2015)+

図書館のHPから利用することができます。

〈藤女子大学機関リポジトリトップ画面〉



図書館委員会からのお知らせ

2016年度図書館委員

図書館長

渡邊 浩(文学部・文化総合学科)

委員・文学部

井筒 美津子(英語文化学科)

関谷 博(日本語・日本文学科)

平井 孝典(文化総合学科)

委員・人間生活学部

飯村 しのぶ(人間生活学科)

小山田 正人(食物栄養学科)

小山 充道(保育学科)

委員・職員

中村 友昭(図書課長補佐)

麓 あゆみ(花川事務室情報サービス係長)

2016年度図書館委員会として実行すべき課題

昨年度に引き続き、①藤女子大学機関リポジトリの構築とコンテンツ内容の充実、②ラーニング・commonsの活用、③図書館と学生との協働

機関リポジトリについては9月1日に公開する予定です。図書館と学生の協働については今年度後期に企画を検討中です。

図書館情報システムの更新

図書館情報システム更新に伴い、2017年3月頃に1週間から10日程度閉館する予定です。日程につきましては詳細がわかり次第、図書館の掲示版・ホームページ、ポータル等でお知らせいたします。

ミケランジェロと システイーナ礼拝堂の天井画

日本語・日本文学科 松村 良祐

ルネサンスの巨人と言われたミケランジェロ・ブオナローティは、縦40メートル×横14メートルにも及ぶシステイーナ礼拝堂の巨大な天井画の制作を終えたとき、次のように述懐したと言われている。「労苦の末に私にはあたかも水がロンバルディアの猫につくるような甲状腺腫が生じた。(…)私の腹はあごに向けて脹れ、私のひげは空を向いて逆立ち、私の頭蓋は背につき、私の胸はハーピーの胸にも似ている。私の顔は画筆からの滴りで雑色の板石の床ようになった。私の腰は身体にめりこみ、私の尻は平衡錘となった。私は足元の見えぬままに当てずっぽうに歩く。私の皮膚は前面では張り、背面ではしわが寄り、私は曲ってあたかもシリアの弓のようだ(ロマン・ロラン『ミケランジェロの生涯』「くじける力」より)。」

システイーナ礼拝堂の天井部全体に『創世記』の聖書的世界を描くに当たってミケランジェロが選んだフレスコ画の技法は、彼に多くの労苦を味わわせるものであった。この技法は古くから西洋の壁画に用いられてきたものであるが、それは、壁面に漆喰を塗り、その漆喰が乾ききっていない「fresco(新鮮な・出来立ての)」状態の内に、水や石灰水を溶いた顔料で筆を入れるというものである。それゆえ、フレスコ画は基本的にやり直しがきかず、事前の綿密な計画と高い画力を制作者に要求したのである。しかし、システイーナ礼拝堂の天井画を制作するに当たってミケランジェロが経験した困難は、フレスコ画という技法面に尽きるものではなかった。すなわち、システイーナ礼拝堂の天井部は床から20メートルの高さにあり、ミケランジェロは制作用の足場を自ら設計し、狭く不安定な場所で頭上の天井画制作に臨んでいる。このように常に上を向いて行われる作業はミケランジェロに多大な身体的苦痛をもたらす

ものであったに違いない。そして、こうした制作に関わる幾多の困難や苦労が上記に引用した言葉に繋がっているのである。

図書館に所蔵されている『ミケランジェロ素描全集』(とりわけ第1巻)は、ミケランジェロが天井画のために描いた習作を多数収録し、天井画制作に至るまでの彼の試行錯誤の跡を見取ることが出来る貴重な史料である。そこで、ミケランジェロは画学生を思わせるよ



うな熱心さで人間の手や足のそり、腰のねじれ具合を幾度となく描いている。天井画の完成からおよそ270年の後、この地を訪れたゲーテは『イタリア紀行』の中で、「一人の人間が何をなすうるかを知らなければ、この天井画を見るがよい。偉大有能な人物のことをたくさん人に聞いたり本で読んだりするが、ここにはそれが頭上や眼前に生き生きと存在している(1787年8月23日)」と述べ、ミケランジェロを高く評価した。しかし、天井画を制作するために残された素描群は、その偉業が数限りない労苦の末に遂げられたものであることを雄弁に物語っている。

同じく図書館に所蔵されている、近年の修復によって鮮やかな色彩が甦った天井画の様子を取めた『ミケランジェロ・システイーナ礼拝堂』と共に見られることをお勧めしたい。



『ミケランジェロ素描全集』請求記号723/Mi13/1-4 (本館所蔵)

『ミケランジェロ・システイーナ礼拝堂』請求記号723/Mi13/1-4 (両館所蔵)

● 編集後記 ●

図書館だより92号をお届けいたします。

巻頭言には、「動物絵本画家 あべ弘士氏が花川に!」と題して、7月に本学保育学科講義にて講演をくださった絵本作家のあべ弘士さんの記事を柴村紀代先生よりご寄稿いただきました。講義の面白さが伝わってくるような文章です。当日は保育学科一年生の講義なので、他学年、また他学科の皆さんは聞く機会に恵まれませんでした。柴村先生の文章を通じて動物絵本に興味を持っていただけたら嬉しいです。

また、今年度図書館に導入した、英語多読用e-bookについてのお知らせを食物栄養学科の高橋博先生にご執筆いただきました。学内ではスマホからでも、またアカウント取得で学外からでも使えるサービスです。ぜひ活用してください。

図書館資料Navi第8回には日本語・日本文学科の松村良祐先生から「ミケランジェロとシステイーナ礼拝堂の天井画」と題してご寄稿いただきました。また、両学部の方から自著紹介文のご寄稿もいただきました。皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。(m.k.)



図書館キャラクター
「きしんさん」

ケータイから
本が探せます!



QRコード

藤女子大学 図書館だより 第92号 2016.10

発行者 藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西2丁目

TEL 011-736-5407 FAX 011-709-4770

<http://www.fujijoshi.ac.jp/library/>